# 北方ルネサンス・中世フランドル地方の芸術都市
# 「世界遺産の宝庫」ブリュージュとゲント
## ～画家「ヤン・ファン・エイク」の功績～

「フランドル地方」とは、主にベルギーの北西部を指します。フランドル地方にはベルギーを代表する歴史都市ブリュージュとゲントが在ります。この２都市は中世から交易の街として発展し、現在でもブリュージュは西フランドル州の州都、ゲントは東フランドル州の州都となっています。２都市とも、数多くの世界遺産の登録物件があり、芸術の分野でも拮抗した存在となっています。

このフランドル地方で展開したのが、イタリアより北部で発達した芸術運動「北方ルネサンス」です。15 世紀前半から 16 世紀にかけて、ネーデルラント（現在のオランダやベルギーなど）を中心に広がりをみせました。当時の絵画は「初期フランドル絵画」に分類されます。

ブリュージュは、13 世紀後半から羊毛の輸入貿易で繁栄したハンザ都市で、当時は内陸にありながら、北海と幾つもの運河で結ばれていました。時代を経て泥が水路に溜まり、やがて街は衰退し、現在のような中世の街並みが残ったのです。このハンザ都市の街並みは、『ブリュージュの歴史地区』として世界遺産に登録されています。ギルドハウスなどに囲まれた街の中心マルクト広場は中世のままで、とても美しい街の景観を残しています。世界遺産に登録されたのも頷けます。一方、ゲントの街には、中心をレイエ川が流れ、両岸にはギルドハウスが立ち並んでいます。世界遺産には登録されていませんが、夜にライトアップされたギルドハウスと川面に映し出されたその光の影は、とても幻想的です。

２都市とも水運交易で栄えた中世の街、ギルドハウスは当時の街の繁栄を彷彿とさせます。この２都市間の距離は約 40 km、インターシティ（特急列車）に乗れば 30 分程度です。

また、「世界遺産の宝庫」といって良いほど数多くの登録物件が在り、ブリュージュには『ブリュージュの歴史地区』、『フランドル地方のベギン会の建物』、『ベルギーとフランスの鐘楼群』の３つ。後ろ２つは、ゲントにも当てはまります（2022 年９月現在）。

芸術（美術）に目を向けると、ブリュージュにはベルギー七大秘宝のひとつ、ハンス・メムリンク作『聖ウルスラの聖遺物箱』を収蔵するメムリンク美術館、ヤン・ファン・エイクの傑作『ファン・デル・パーレの聖母子』や、20 世紀前半のマグリットやポール・デルボーなどのシュールレアリスム絵画などを幅広く展示しているグルーニング美術館などが在ります。対してゲントでは、聖バーフ大聖堂でヤン・ファン・エイク兄弟の大作『ゲントの祭壇画（神秘の子羊）』を観ることができます。

ヤン・ファン・エイク

そして、この２都市で活躍したのが、画家「ヤン・ファン・エイク（1390-1395 年頃？～1441 年）」です。 主に、ブリュージュを拠点としてして活動していました。ヤン・ファン・エイクは、いつ生まれたのか、どこで生まれたのか、はっきりしていません。バイエルン公ヨハン３世やブルゴーニュ公フィリップ３世などに仕え、宮廷画家として富と名声を得ていた、初期フランドル派を代表する画家です。

ヤン・ファン・エイクは、後の美術の世界に画期的な“２つの功績”を遺しています。
ひとつめは、油彩画の技法を確立したことです。それまでは、主に卵と水を混ぜたテンペラで描くのが主流でしたが、フランドル地方は亜麻仁油（アマニゆ）の産地ということもあり、15 世紀初頭には既に、顔料に油を混ぜる油彩画が多く描かれていました。ヤン・ファン・エイクは油彩技法を確立し、画家の頂点に登りつめた成功者として、後世に語り継がれています。ちなみに、レオナルド・ダ・ヴィンチは、ヤン・ファン・エイク没後の 1452 年に生まれています。レオナルド・ダ・ヴィンチよりも前に、ヤン・ファン・エイクは、油絵具を何層にも薄く塗り重ねるなど、後のスフマート技法に繋がる技法を行っていました。つまり、ルネサンスが花開いたフィレンツェがテンペラ画全盛の頃、フランドル地方では先んじて油彩画の広がりをみせていたのです。
ふたつめは、作品に「サイン（署名と日付）」を入れた最初の画家とされています。実際には、他の画家たちも署名していたのかもしれませんが、高名なヤン・ファン・エイクだったからこそ、世に“サイン”として認められたのでしょう。中世以前の絵画は、キリスト教の教えを伝える役割が多かったため、誰が描いたかは、さほど重要ではありませんでした。しかし、ヤン・ファン・エイクは、当時のフランドル地方で最高権威の画家であったため、その技量も含め、自らの誇示をする必要もあったのだとも考えられます。また、後のイタリアのルネサンス期の著名な画家たちの多くは工房を営んでいて、自身の作品、弟子の作品、共同作品などの識別をするために署名をする場合もありました。

それでは、ヤン・ファン・エイクの作品を観てみましょう。

ゲントの祭壇画（神秘の子羊）

ゲントの『ゲントの祭壇画（神秘の子羊）』は 12 枚のパネルで構成された祭壇画（約 350 cm×約 460 cm）です。兄のフーベルト・ファン・エイク（1390 年以前？～1426 年）が描いていたものを、兄の死後、ヤン・ファン・エイクが引き継いで完成させた共同作品です。完成が 1432 年なので、少なくとも６年以上かけて制作されたことになります。この作品の兄弟の制作領域は分かっていません。また、残念なことに、後世に加筆や修復が何度も繰り返されました。

上段の７枚のパネルの作品は、かなり精緻に描かれていて、質感も見事に表現されています。それに対し、下段の５枚のパネルは、そこまでの緻密さを感じません。特に「神秘の子羊」のパネルは、人物の大きさからみても遠近感が表現できていませんし、絵に立体感がなく、細かく描いているだけのようにも見えます。途中段階で妥協して筆を置いたのでしょうか。私には、下段の５枚のパネルが、ヤン・ファン・エイクの手掛けた作品とは思えません。兄のフーベルトの作品なのかもしれません。弟子かもしれません。それとも、後世の加筆の影響なのでしょうか。加筆は修復という面もありますが、作品を別のものに変えてしまう“諸刃の剣”でもあります。

ブリュージュのグルーニング美術館の『ファン・デル・パーレの聖母子』は、1436 年に制作された比較的大きな作品（約 140cm × 約 177cm）です。

ファン・デル・パーレの聖母子

正面に描かれているのは聖母マリアと幼子イエスですが、その向かって右側、高齢男性の顔が目立ちます。一般的に考えると絵の主役は聖母マリアなので、この男性は少し控えめに描いた方が良いのですが、際立って描かれています。実は、この男性はこの作品の

依頼主です。そのあたりも配慮して、描いているのですね。
　聖母マリアは赤い服。高齢男性は白い服。見事な色彩コントラストが引き立ちます。また、向かって左端の司祭を青い服にして、３色で調和を保っています。しかしながら、高齢男性の背後にいる鎧姿の男性は、目立たない色調です。色調がとてもはっきりとしているのも、この作品の特徴です。また、作品の中のそれぞれの細かいパーツの質感は、ものの見事に表現されていて、その描写力はまさに神業です。

　２作品をご覧いただいて、何かお気づきでしょうか。
　どうやって描かれたのか、その緻密な描き方を探ってみましょう。

　まず、彩色については、どのような顔料を使用したのか、どのように塗り重ねられているのか、Ｘ線調査で、ある程度は明らかになります。ヤン・ファン・エイクの作品は、絵の具が実に何層にも薄く塗り重ねられています。疑問に思うのは、どうやってここまで緻密に描いたのか、です。もっと言えば、どのような道具を使ったのでしょうか。濃淡のある色彩とは異なり、描き方は痕跡が残りにくいため、解明しづらいのです。当然のことながら、基本は筆で描いています。しかし、現代の画材店で販売されている筆、いわゆる市販の筆の最小サイズは「０号」です。ヤン・ファン・エイクの作品は、この０号でなんとか描けるかどうかの世界です。画用紙ほどの小さいサイズに描くのであれば手振れは起きませんが、ご紹介したヤン・ファン・エイクの２作品は大作です。この大画面の上部や中央部などは描きにくいはずですが、手振れの影響は全くみえません。塗り直しの跡すら無く、mm 単位の画面を一発勝負で描き切っているのです。いくら、なめらかで優れた油絵具だったとしても、塗り直しは難しい仕事です。絵画技法や道具などが発達した現代でも、これほどまで極めるのは至難の業です。ましてや、インターネットなどで情報を手に入れられるような時代ではなく、その描き方の手本となるものはありません。ヤン・ファン・エイクは、筆に限らず何らかの突起物の先端を使うとか、高度な拡大鏡を使ったのかもしれません。超極小サイズの筆を独自に作ったのかもしれません。
　「神の手を持つ画家」と称されたヤン・ファン・エイク。どのようにして描いたのか未だ解明されておらず、その描き方は最大の謎です。現代の画家でも、ここまで精緻に描くことはできないと思います。ゆえに、「神の領域」なのです。

アルノルフィーニ夫妻の肖像

続いて、ロンドン・ナショナルギャラリー蔵の『アルノルフィーニ夫妻の肖像』（1434 年頃）の作品もご覧ください。正面の鏡は直径５cm程度です。鏡の中や鏡の外枠の装飾など、一般的な筆だけでは描けないと思います。

　参考までに、現在の細密画法について、一例をご紹介します。トレーシングペーパーなどを使い、描きたい写真をなぞり書きして、トレーシングペーパーの裏面を鉛筆で塗りつぶし、画用紙などに転写して、その上に着色をします。着色は、画面の端からパーツごとに色を塗っていきます。イメージに近いのは「塗り絵」で、デッサン力は不要です。西洋の伝統的

な絵画技法はデッサン力重視で、全体を捉えてから細部を描き込んでいきます。細密画は、それとは一線を画す技法なので、画家というよりも、職人の制作手法です。

ヤン・ファン・エイクはどうであったかというと、『枢機卿アルベルガティの肖像』（1435 年頃／ウィーン美術史美術館蔵）の油彩画をご覧ください。下絵のデッサンもしっかりと描いていて、段取りをきちんと踏んだ西洋の絵画技法をベースに描いています。

枢機卿アルベルガティの肖像

ブリュージュとゲントには、
ヤン・ファン・エイクの銅像が在ります。
ブリュージュの銅像は運河に面した広場に立ち、ゲントでは聖バーフ大聖堂の前に、フーベルトとヤン、兄弟揃っての像です。このことから、ヤン・ファン・エイクがブリュージュとゲントの街の発展に貢献（こうけん）し、街の人々にとっていかに重要な人物であったかが分かります。数々の功績を遺したヤン・ファン・エイク。最大の功績は、ブリュージュやゲントの数多（あまた）の史跡を世界遺産に導いたことかもしれませんね。

ブリュージュの銅像

ゲントのファン・エイク兄弟の銅像

ブリュージュもゲントも、ベルギーの人気の観光地です。観光で訪れると、中世の街並みや教会建築の美しさなどに目を奪われがちになりますが、時間が許すなら、ブリュージュのメムリンク美術館とゲントの聖バーフ大聖堂に足を運んで、今回ご紹介したヤン・ファン・エイクの２枚の傑作をぜひ鑑賞してみてください。

沼田政弘

～ちょこっとコラム～

ブリュージュは、「レース編みの街」としても知られています。15 世紀頃から、ベギン会の修道院の女性たちが身に着けるようになり、今ではブリュージュの特産品となっています。街を歩いていると、レース用品のお店が幾つも在り、お土産として人気です。

ヨハネス・フェルメールの作品『レースを編む女』を観ると、当時のレース編みの様子が伝わってきます。